

ONE WORLD

Info

英語教育 通信

教育出版
ウェブサイト連載で
大好評の対談を
全文掲載！



対談

松本 茂 × 安河内 哲也

アクティブな英語教育を目指して

教育出版

はじめに

Contents

英語教育通信2017年春号をお届けします。

今号では、英語教育のこれからを見すえて、
松本茂先生と安河内哲也先生の対談を
特集しています。

日々の授業のあいまなどに、
お楽しみいただければと思います。

03

特別対談

松本茂 × 安河内哲也

18

小学校の教科化を踏まえ、
中学校の授業はどう変わるか

本多敏幸

20

連載 1

とっておきの英語 野田小枝子

22

連載 2

今ドキ英語事情 ピーター・J. コリンズ

特別 対談



松本茂×安河内哲也

アクティブな英語教育を目指して

「やればできる!」でおなじみの安河内哲也先生と、

NHKテレビ「おとなの基礎英語」でおなじみの、*ONE WORLD*代表著者、松本茂先生との特別対談です。

英語教育界の改革を目指す同志として互いを認め合うお二方に、これからの英語教育のあり方について、語っていただきました。

「カリスマ予備校講師」が
文部科学省へ!?

松本 安河内先生とは、文部科学省でのさまざまな会議で一緒に、目指している方向性が非常に近い同志であると勝手に思い込んでおります。先生は「カリスマ予備校講師」として知られる一方で、文科省の会議に出られたり、麹町学園女子中学高等学校の英語科特別顧問を務めたりされていますね。予備校では

なく、学校教育の改革のお手伝いをするようになったきっかけは、どのようなことだったのでしょうか。

安河内 すべてのきっかけが本当に偶然でした。そもそも私は20年間、大学受験の準備のための予備校で教えてきたので、バリッパリの受験英語を、知識伝達型の授業で教える、松本先生の対極にあるような、悪い英語教師の見本のような講師だったんですよ。



安河内 哲也 やすこうち てつや
東進ハイスクール・東進ビジネススクールのネットワーク、各種教育関連機関での講演活動を通じて実用英語教育の普及活動をしている。特に各種4技能試験の普及活動にも熱心に取り組んでいる。文部科学省の審議会において委員を務め、大学入試への4技能試験導入に向けて積極的に活動中。

松本 いやいや、悪い見本なんてことはないでしょう。

安河内 とはいえ、受験英語を教えながら、「これはやっぱり違うだろう」とわかるわけですよ。たとえば、「クジラの公式」がなぜこのような構文であるかを1時間かけてレクチャーすることに意味があるのかと、授業をやりながら悩んでいたわけですね。しかし、やはり大学受験が変わらなければ、こういう受験英語はなくならない。そんな矛盾のなかで働いていた思いを書き綴ったものを、影響力のある方にお渡ししていたら、それがどなたかの目にとまったのか、声がかかって、文科省の会議の委員として入試改革の提言に関ることになりました。(※2014年「英語教育の在り方に関する有識者会議」)

麹町学園の英語教育改革で
ONE WORLDを採用

松本 なるほど。では、麹町学

園の英語教育に関わるきっかけはどのようなことだったのでしょうか。

安河内 これまでの中学校・高校の授業は、受験英語の影響を相当に受けてきていますよね。そうすると、大学入試を改革すると同時に、学校のなかでも、より学習指導要領に準拠した4技能型の授業をするように変えていかなければならない。そのような学校教育の改革に対して、何かできることはないかなと思っていたときに、私と同じ大学の卒業生で、麹町学園で働いている人から、「この学校の英語教育をぜひ改革していきたいので、一緒にやりませんか」と言ってもらって、顧問を引き受けることになったんです。

松本 麹町学園では、まず、それまで使っていた教科書をやめて、ONE WORLDを採用していたわけですね。それまでの教科書はどのようなタイプのものだったのですか。

安河内 私学では、「文科省検定外」の難しい教科書を採用して

いるケースが多いですよ。麹町学園も例外ではなく、難しい検定外教科書を使っていました。決して悪い教科書ではありませんでしたが、必ずしも私たちの生徒のレベルには合っていませんでした。難しい教科書で難しいことばかりやっていると、英語そのものが嫌いになってしまう。では何をを使えばいいのかと考えたときに、やはり学習指導要領に準拠していて、日本の中学生の平均値にあわせてつくられている検定教科書だろうということになったのです。検定教科書にも百花繚乱があるなかで、なぜONE WORLDになったかという、松本先生がつくられているから、これに賭けて学校教育をやれば大丈夫だろう、と。

松本 いやいや(笑)。…それはともかく、お話のなかで、生徒のレベルに合っていない教科書という問題が指摘されました。これは中学だけではなく、高校でもありがちな話ですね。見栄を張っ

て難しい教科書を使ったり、「あの高校でこれを使っているんだからうちでも使おう」となった。あるいは、「自分が高校生の時にこれを必死に勉強したんだから同じ教科書を」というような発想で採用が決まることもあるようです。

難しすぎる教科書では成績は上がらない

安河内 私は20年間、予備校講師として生徒の成績を上げることをだけを職業にしてきたのですが、生徒の成績を上げるために重要なポイントが2つあります。ひとつは、いきなり難しいことをやらせず、まずはレベルに合ったことから始めて、スモールステップで実力をつけていくということです。もうひとつは、「たくさんやらない」ということです。たくさん問題を解かせれば英語ができるようになるとは限らないので、そこは成績を上げるためにも予備校では気をつけています。

松本 予備校で、たくさん問題を解かせるばかりにしないようにしているというのは、意外ですね。

安河内 ところが、多くの学校では逆をやっています。「難しいものをやらせれば生徒のレベルが上がるんじゃないか」、「文法の参考書を覚えさせれば合格実績が上がるんじゃないか」という期待のもとに、学校同士で参考書の分厚さの競争をやっていますが、多くの場合、それが成績が上がらない原因になっています。

「多すぎる宿題」「分厚すぎる副教材」「難しすぎる教科書」の3つですね。

松本 難しすぎる教材を使うと、結局日本語で授業せざるを得なくなっていて、英語を読む量が極端に減ってしまいますよね。

安河内 そうですね。教えてあげないと生徒が自主的・自律的に理解することができないような内容を扱っていますから、知識伝達型の授業になってしまいます。つまり、先生がずっと黒板にS、V、O、Cなどと書きながら説明して、生徒はそれをノートに写す。とりあえず英文の構造と意味がわかる、という授業です。当然ほとんど日本語で進行して、結局、生徒の口は動かない授業です。難しい教材を使っていたときには、おそらく私たちの学校もそうになっていたと思います。

先日、松本先生にも今の麹町

学園の授業を見学していただいたそうですが、ご覧いただいた通り、今、私たちの学校の英語の授業は、先生は司会者役で主役は生徒。とにかく「生徒の口が動く」授業になっています。教材を検定教科書一本に絞ったおかげで、生徒たちに余裕が生まれました。そして、「わかるから楽しい」「もっとできるようになりたい」という好循環が始まったと思います。

(編注：『ONE WORLD Info』2016年秋号「編集部の授業レポート」参照)

教科書を反復して英語のコアを育てる

松本 内容がわかりやすいからというのもあると思いますが、ONE WORLDの場合、本文、Activity、Task、Projectという段階を踏んだ構成になっていて、徐々に、モデ

松本茂 まつもと しげる
マサチューセッツ大学ディ
ベート・コーチ、神田外語
大学助教授、東海大学教授
などを経て、2006年4月より
立教大学経営学部国際経営
学科教授。同学部バイリン
ガル・ビジネスリーダー・
プログラム (BBL) 主査。同
大学グローバル教育センター
長。



ルを使いながら自分で考えて—今の言葉でいうアクティブ・ラーニングですね—最終的には自分の考えや、自分の集めてきた情報を友だちとシェアするという活動をする。そのように、ある意味、日本語でやっても意味のあるような活動が英語でできる、ということの特徴としてつくってきた教科書になっています。

安河内 私たちは恵まれていて、私学なので授業数が公立校に比べると多いです。本文や、そこに出てきた文法事項を理解するだけではなくて、*ONE WORLD*のなかにたくさん準備されているProjectや、ディスカッションなどの活動をやる時間がかかりとれますので、*ONE WORLD*を骨の髄まで使いこむことができる環境にあります。

もうひとつ、*ONE WORLD*について、すごくいいなと思ったのは、最後にはさんである別冊Essentialsが取り外せることです。



英語が苦手な子にとっては、教科書全部を学ぶことはとても負担ですが、「まずはこれだけ完璧に覚えればいいよ」という、コアだけを抜き出したものがあると勉強しやすい。英語の学習において、芯の部分をつくって塗り固めてから外に広げていくときに、その芯となるEssentialsのようなものがあるのはすごく助かります。

松本 教科書の作り手として、たいへん嬉しいお話です。

安河内 大事なのは、教科書から離れないことだと思います。多くの学校では、3年生になると教科書は使わないで、入試問題演習に時間を使い始めます。高校入試があったとしても、私は教科書の内容から離れないで、生徒の口が動く活動を、教科書を反復して何度もやったほうがいいのではないかと考えています。



生徒たちは改革への不安を感じていた

松本 なるほど。私が授業を拝見したときも、生徒さんが本当に楽しそうに活動されていましたが、たとえば保護者の方がこういう授業をご覧になって、「これで大丈夫なんですか？」という意見は出ないのでしょうか。

安河内 そういう意見は保護者の方からよりも、生徒のほうから来ますね。去年までの知識伝達型中心の授業から、やることが本当に劇的に変わりましたから。

でも正直、去年までの授業では、寝ている生徒もけっこう多くて（笑）。でも、知識伝達型の授業だと、どんな学校でも寝ている生徒っていますよね。

麹町学園の授業改革が始まった4月から、私は高校1・2年生を中心に、授業の様子をずっと見てきていますが、寝ている生徒がひとりもいません。すべての生徒が起きて、何かやっているという状況になっていますね。

松本 しかし、「これで力がつくのか？」という意見も出るわけですね。

安河内 保護者の方からはそれほど出ないです。保護者のほうは、学校ですっと知識伝達型の授業を受けてきたけれども英語ができるようになった感覚がなく、「なんであんな勉強をしてきたんだろう」と振り返って後悔されている方が多いので、私たちがやっているような授業を理解して見守ってくださっている方が多いです。

先生方には、「受験英語をやらなくて大丈夫だろうか？」というためらいがありました。予備校講師の私ですら、いわゆる受験英語のようなことは今はもうやめてきていて、しかもそのほうが実績が上がっているわけですが。

やはり、いちばん戸惑ったのは生徒ですね。これまでずっと、ほとんど日本語の講義の授業だったのが、急に変わりましたからね。そういう授業を受けてきた学年の生徒たちは、急にアクティブになったものですから、「楽しん

で大丈夫なんですか？」と（笑）。

松本 「文法の説明をがまんして聞かなくても大丈夫なんですか？」と、生徒が不安になったわけですね（笑）。

安河内 しかし半年たって、やはり数値的な成果が出てくるわけです。麹町学園には特進科と普通科があるのですが、とくに普通科の生徒の外部検定試験の成績が、急激にこの半年で上がっているんですね。検定試験の結果だけがすべてではないですが、何の対策もしていないのに点数が上がったんです。そこで生徒たちは気が付いたようですね、こ

安河内 学年によって違いますが、だいたい週6時間あります。

松本 公立の学校では週4時間でですね。そのなかには、「教科書をやるのが精いっぱい」という先生、精いっぱいどころか、「あふれてしまう」という先生もいます。そういう方々に何かよいアドバイスはありませんか。

安河内 「教えてから活動」というやり方だと、どうしても時間が足りなくなってしまうです。私たちの学校では、単語の意味リスト、全文和訳、問題の解説といったものは印刷して生徒に渡すという方法をとっています。ラ



のやり方でいいんだと。

教室という場が変わった

松本 麹町学園では、週に何時間英語の授業があるんですか。

イティングは大事なので、スペリング練習はある程度させますが、知識伝達型の授業ですっとノートに書き写させていたようなことは、印刷して配って事前に、あるいはあとで確認するということにしています。中学の教科書であ



れば、そんなに講義しなくても、活動をしていれば覚えていきますので、今までノートに書いたり、授業中がまんして聞いたりしていたことを、プリントで配布するなどの方法で省いていく。

松本 教室という場が変わったということですね。つまり、今までの学校の教室は予備校と同じように先生が主体で、生徒同士の関係性はほとんど無視されていた。一生懸命聞く子はノートをとっていたし、つまらないと思う子は寝ていた。

授業をコミュニケーション
の場とする

安河内 麹町学園では授業に5つのルールがあり、授業の始めにみんなで読み上げます。“Have fun.” “Keep smiling.” “Be creative.”といったルールがありますが、いちばん大事なルールは“Help each other.”です。ひとりで勉強しない、みんな

で勉強する。

松本 ひとりで勉強するなら学校というものは必要ない。文科省が言っている、「授業をコミュニケーションの場とする」ということです。

安河内 進学校に行くと、「勉強は自分との戦いだ」と言われます(笑)。ひとりで机に向かって打ち込むのが勉強だと。しかし、それだったら、学校というコミュニティがなぜ存在するのかということですね。学校に来る目的は、友だちがいて、人との関係、集団のなかでの行動を学ぶことです。とくに、外国語である英語を学ぶときには、母国語を身につけるときにしたように、人との関わり合いのなかから言葉を吸収していくということを、もう一度始めなければならないわけですから。

松本 まずはコミュニケーションが大切だということですね。

安河内 教室の雰囲気がよくな

る効果もあります。たとえば教室に40人の生徒がいたとすると、そのなかで、数人から10人くらいのグループでセクトができ、そのなかの子としか話さないという現象が起きてきますよね。

英語の時間に私たちがやっているのは「総あたりペアワーク」。毎回違う相手とペアになって、いろいろな活動をする、クラスにいる全員と英語の時間に一度や二度は話したり、ハイタッチしたりしている状況ができます。これはいじめ抑止にも効果があるのではないかと思います。

松本 女子校の場合はとくに必要かもしれないですね。特定の友だちだけのグループをつくりがちかもしれないですから。

安河内 ペアワークも、先生がきちんと座席表をつくって、「今回はこう」と指示しないと、生徒は自主的にはなかなか新しい人とペアにはならないですね。だからセクト化していくことになるの

だと思います。

松本 立教大学でも、4～5人の「島」をつくって授業をしています。毎回席が替わるように、教師がネームカードを置いていきます。そうしないと、学生同士で新しい発見がなくなって、意見を言わなくてもわかりあってしまう。

安河内 塾や予備校であれば、「受験は個人の戦いだ」と言って、ひとりで勉強するのもありだと思うんですけども、やはり学校はそういう場所ではないと思うの

に伺ったときに、「i Lounge」という、いわば「英語の部屋」があって、中学生向けの多読教材も置いてありました。あのような、個人の学習への支えもあって、教室での活発なインタラクションがあると思うのですが。

安河内 確かに、英語がものすごくできるようになるためには、教科書だけでは足りないと思います。一方で、英語のコア（核の部分）を育てるには教科書で十分だということもあって、そこは

読み進めるわけですね。そのようなことができる環境が公立の中学にも欲しいなと思います。いろいろな英語教材や、CDやDVDもありましたね。

安河内 あの部屋には、私がアメリカに行ったときにたくさん買ってきたものが置いてあります。日本の、宮崎アニメのアメリカ版DVDとか、日本のマンガの英語版とか、多読用につくられたgraded readerなどです。子どもたちに英語のコアができあがってき



▲ i LoungeにはALTが常駐し、生徒たちは好きなときに訪ねることができる。またレベル別にさまざまな読み物を常備。

で、コミュニティを大事にしたいですね。私が仕事をしている予備校でも、実際には受講生がコミュニティ化するように心がけています。

英語へのexposureを増やす「i Lounge」

松本 「教科書から離れない」というお話があったのですが、本当に読む力をつけるためには、教科書にある英文だけでは足りないと思うんです。麹町学園に見学

しっかりと分けていけないといけません。つまり、繰り返し学習して完璧に自分の言語能力のコアとしていくものはONE WORLDだけ、ほかは一切やらない。一方で英語へのexposureですね。「覚えない・調べない・繰り返さない」という3原則にもとづいて、たくさん楽しむ。

松本 「覚えない・調べない・繰り返さない」ですか…。つまり、一生懸命覚えようとしたり、辞書で調べたりしないで、わからない単語は飛ばして、楽しみながら

で、「同じものの繰り返しでつまらないな」「もっといろいろ読みたい」となったときに、週に1時間くらい「今日は多読をやります」と言ってあの部屋に引率していきたいです。

あの部屋には丸椅子しかなくて、机はありません。本を読んだりアニメを見たりして、英語にexposeされることだけに1時間費やせる。またそこには放課後も昼休みもALTが常駐しているので、子どもたちはそこにいてALTとゲームをしたりして英語に

exposeされるんです。そんな環境をつくってあげたくてあの部屋ができたんですね。

知識伝達型の授業では、成績は伸びない!?

松本 なるほど。予備校での授業も変わりつつあると先ほどおっしゃっていましたが、どのように変わっているのでしょうか。

ているんですけど、どうして聞いているかという、一生懸命聞かないと先生がかわいそうだと思っているから（笑）。

松本 「安河内先生があれだけ汗をかいてがんばっているんだから、聞いてあげないとかわいそうだ」と（笑）。それはそれで、すばらしい人間関係なんじゃないですか。

安河内 一方で、そのような授業

安河内 基本的に、英語は知識伝達型授業を通じて勉強する科目でなく、練習する科目なので、「予備校の学習にも練習という要素を入れなければ成績が上がらないだろう」と切り替えたのです。

「受験英語」だけでは総合的な点数が上がらない

松本 でも世間の人は、大学入試は伝達される知識を覚えれば受かるものだと思っているのではないですか。

安河内 でも、現在の大学入試ですら、とくにセンター試験は、知識伝達型では厳しいと私は思います。センター試験は、4技能のバランスがとれた指導を求める学習指導要領に準拠してつくられていますよね。4技能のうち、リスニングとリーディングは直接測定（問題が解けること＝その能力があるということ）で、スピーキングとライティングは発音問題や文法問題によって間接測定している。しかし、間接測定の部分はそんなに配点は高くない。受験英語が通用するのは間接測定の部分ですよ。話が難しくなっていますが…。

松本 つまり、今の入試では、スピーキングができるかどうかを、実際に話させて測定するのは難しいので、発音問題で見たり、会話問題で穴埋めさせたりすることで間接的に見ているわけですね。あるいは、書く力を試すために整序問題や4択文法問題を解かせている。

安河内 予備校は本来、テストに向けて勉強する過程で最大の実績を出すことを存在目的にしています。私は20年間、そこで知識伝達型の授業をしてきましたが、実際にどれだけ成績が伸びたかという記録を見ても、知識伝達型ではそんなに伸びなかったのです。

ずっと知識伝達型授業で、熱血講師として、わかりやすく教え、それを生徒も一生懸命聞い

では英語を学んではないんですよ。ピアノ教室に例えるとわかりやすいです。ピアノ教室に行って、先生が一生懸命に楽譜の読み方を教えて、楽譜を書いて、読み方を覚えて、楽譜の問題を解いたとする。でも指は一切動いていないわけです。そのピアノ教室に10年通って、ピアノが弾けるようになるかということです。

松本 ああ、そういうことですか（笑）。



安河内 ところが、そのようなところから「受験英語」が生まれてくるわけです。きちんと考えられたすばらしい問題が出されているのですが、私たち予備校はそれを受験英語風に解釈してしま。「整序問題では主語と述語を見つけて、そのあとの要素をくっつけてから修飾語を置いていくんだ」とかね。英語でなくなっていくわけですよ。消去法で、「この動詞を見つけたらこれを消去」とかね。発音問題だったら「ateがあったら2つ前に印をつけよう」とか。英語を話すときに本当はそんなことは考えないわけじゃないですか。そういう受験英語風のものは、ほぼ間接測定の部分から生まれてくるわけです。またそれは、日本人が日本語で授業をするのに適している。そこから参考書も生まれてくる。

松本 そのような予備校の授業を、やはり変えていかなければならないと思われたわけですね。

安河内 実は、そういう受験英語をやって点数が上がる部分は、センター試験全体から見ても多くないし、配点も低いのです。本当に点数が上がる部分は、「長文を速読してパラグラフの要旨をつかんで選ぶ」というような、はるかに配点の高い問題のほうです。リスニングも含めて、そうした直接測定の部分で点数を上げるのが、いちばん総合的な点数を上げることにつながるわけです。

松本 そのために、安河内先生はどのような授業を展開されるようになったのですか。

安河内 文法は大事なのでさと教えますが、中心となるのは、長文読解とリスニングの2技能を融合して、音を使って口を動かしながら、長文を左から右に直接処理していくための手法を組み合わせる指導です。リピーティング、シャドウイング、サイト・トランスレーションなどですね。最終的に生徒には、リピーティング用の音声と、シャドウイング用スロー音声と、ナチュラルスピードの3種類の音声データを配布して、それを耳で聞いて全部理解できるようになるまで徹底的にテキストを反復して習得してもらいます。

また、パソコンの音声認識システムを使って、自分の音読の発音がネイティブの発音とどれだけ近似しているかを視覚化して、同じ音が出るように訓練するシステムを提供したりして指導しています。ほかにも、5日間英語オンリーで過ごす合宿を実施しています。でも、そういうことをやったほうが、結局大学入試の実績が上がるわけです。

難関大学を志望する
生徒ですら、英語が話せない!?

松本 その英語オンリーの合宿について、以前にもお聞きしたことがあるのですが、詳しく伺いたいと思っています。まず、どういうレベルの高校生が参加するのですか。

安河内 言ってしまうとお叱りを受けるのですが、選抜で選ばれ

た高レベルの生徒たちです。3年生の夏、入試の半年前に実施します。

松本 お叱りというよりも…非常に高いレベルの高校生というの



は、日本の大学のトップを目指している生徒だと思うのですが、そういう子たちが3年生の夏の段階で、5日間も英語で生活しているということ自体が信じられませんか。ご飯を食べるときも英語で過ごすそうですね。3年生の夏とったら、難関大学を受ける子たちは、必死に過去問を解いているというイメージですが…。

安河内 私が担当している子たちは、第一志望が、早稲田・慶応・上智・ICU・東京外大という

「英語最難関5大学」を受ける子で、センター試験で85～90%くらい得点できる子たちです。帰国子女はあまりいなくて、95%が純ジャパニーズ、日本で英語教育を受けてきた子たちです。合宿で泊まる旅館があるのですが、



その旅館のなかでは旅館の職員も英語で話します。

松本 旅館のスタッフも英語を話すんですか！

安河内 河口湖で、外国人客が多いので英語を話せるんです。バスを降りた瞬間から職員の皆さんが、“Good afternoon. Welcome to ～ Hotel!”と言って出迎えます。それで生徒たちは「こんなところに来ちゃった…」と。

生徒たちは正直言って、最初は全然しゃべれないです。センター試験で90%得点できる子たちが、びっくりするくらい英語がしゃべれないですね。最初は「シーン…」、ご飯を食べているときも「シーン…」という感じで、ときどきこそっと日本語でしゃべったりしているんですけども。

松本 そうですか…。

安河内 これはゼロからやらないとこの合宿は失敗すると思ったんです。そこで考えたのが、「テンプレート型英会話」。つまり、食事の時間や授業のなかで、話す内容をテンプレートとして与えてあげることで。

たとえば、“My dream is to ... because I want to ... in the future.” そのあとは自由ですが、出だしのところをつくってあげるんです。食事が終わったら6人グループのなかで時計回りに“My dream is to ... because ...”と順番に話をさせる。ほかには、“My favorite movie is 題名 because ...”というパターン。「becauseを2つつくってください」という形にして、2日間くらいまわします。すると3日目くらいから、けっこう話せるようになってきます。あとは、教科書の英語を暗唱して、身振り手振りで、ジェスチャー、スマイル、ラウドボイスでペアワークさせます。

最初はこのようにテンプレートや暗唱から入っていくんですけど、4～5日目くらいになるとスピーチができるようになってきます。

松本 そういう子たちは、英語教育に力を入れている大学に入りたいという子たちなんですよ。東大や東工大を志望するような子たちが通っている各都道府県のトップ校のなかには、アクティブ・ラーニングどころか、伝統的な詰め込み型の授業に回帰している学校もあるような気がするのですが…。

入試が変われば、アクティブ・ラーニングをしない理由がなくなる

安河内 先生方はみんな不安なのでしょう。私は、文科省の仕事もさせていただいて、学校にせよ予備校にせよ、アクティブ・ラーニング以外の選択肢が私の進む道から断たれてしまったわけですから、やらざるを得なかった（笑）。でも、予備校でも完全にアクティブな形に切り替えて、結局、進学実績が上がったわけですよ。去年の夏の合宿で私が教えた子が160人。そのうち何名が英語最難関5大学に合格したかという、198名合格したんです。

松本 ちょっと待ってください。160人中198名？

安河内 複数校を受験するので、のべ人数です（笑）。それにしてもかなり多くの子が合格しているわけです。そう考えてみると、アクティブ・ラーニングをやったほうが今の入試のなかでも実績が上がるんです。ただし、だから大学入試を変えなくてもいいという話にはならないと思います。な

ぜ入試を変えなければならないかという点、入試を変えることによってアクティブ・ラーニングをしない理由がなくなるから。今の入試だと和訳の問題や文法の問題が出てきます。

松本 個別の大学の二次試験のほうには出ますね。センター試験でも、先ほど話に出た間接測定の部分、文法問題や並べ替え問題があります。つまり、これらの問題があるということが、アクティブ・ラーニングをしないでよい理由になってしまうと。

安河内 知識伝達型がすべて悪いとは言いません。でも、予備校でよく生徒から言われるんですよ。「声に出したり、耳から聞いたりして英語を使う授業が楽しいから、学校でもやってほしいと思って先生に伝えたら、『入試では下線部和訳が出るから僕は下線部和訳をやるんだ』と言われて」とか。「入試では和訳はわずかしかならないのに、学校の授業は100%和訳になっている」と言ったら、「学校の先生に『センター試験で20問出るんだから文

法が大事なんだ』と言われた」とか。ですから、入試に一部でもそんな問題があると、知識伝達型の授業を続ける理由になってしまいます。しかしながら、世界の入試の趨勢がそうなるように、日本でも4技能均等型・直接測定試験が入試の標準になれば、英語そのものを教えるしか選択肢がなくなります。私が追い込まれてやっているようになります。

大学入試の4技能化で予備校業界は変わるか

松本 4技能均等型・直接測定試験については、多くの私立の大学、そして一部の国立の大学が実際に入試に導入し始めています。そして2020年には大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が導入され、これでさらに4技能化が進む。こうした流れは予備校業界にも影響するでしょうか。

安河内 はい。ただ予備校業界は学校に比べて遅れています。

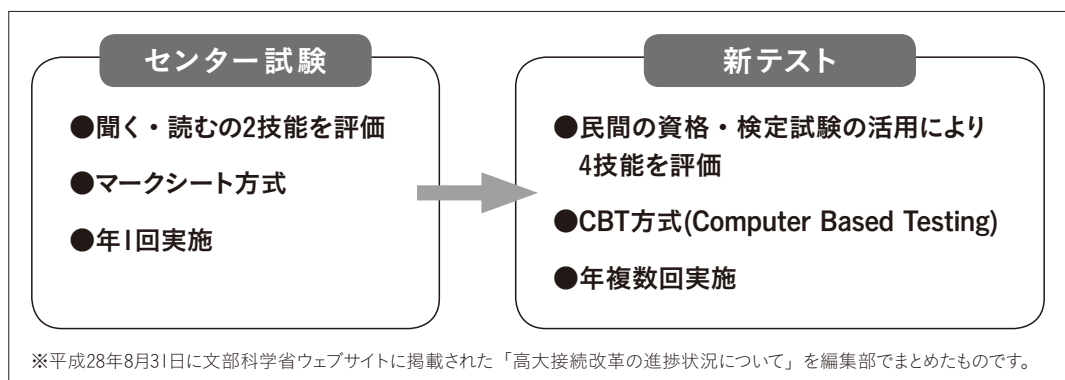
昭和の英語教育を主導してきた業界ですし、市場が1兆円規模と非常に大きいからです。中学の塾ではいまだに、私がアルバイトで教えていたときと同じような文法のドリルをやっています。これではまったく2020年の備えになっていないわけですよ。ただ、今の様子見の段階が終わって、本当に4技能に変わるとなったら3ヶ月で変わります。そこは学校組織のように長い時間をかけて変わるものではないです。

私立中学の入試に英語が加わるのか

松本 2020年度から小学校5、6年生で英語が教科化されますよね。それによって、英語が私立の中学入試に加わるのでしょうか。

安河内 ええ、入試に英語が加わるのは不可避だと思います。この件については松本先生と同様に、わたしも反対です。理由は2つあります。まずひとつは、多くのほかの教科と同じように、英語においても大学入試に似せ

●大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の特徴



た問題を出題しかねないことです。中高一貫の私立の学校などは、大学進学を目的にしているところが多いので、なおさらそうなりかねない。コミュニケーションな問題を出すならまだしも、今の大学入試に似せてつくったら最悪の事態になると思います。

あともうひとつは、EFL (English as a Foreign Language) 環境であればある程度は仕方ない部分ですが、小学生のうちから英語をテストに向けて勉強するのはあまりよくないのではないかと思います。

とは言っても中学入試に英語が加わるのは不可避なことですし、実際に麹町学園では英語入試を始めています。

松本 どういった内容の試験をしているのですか。

安河内 まずは外部検定試験の利用です。自分たちで大学入試をまねてつくくらいなら、外部検定試験である「英検」や、子どもたちのモチベーションを上げるようにつくられている「英検 Jr.」なりを活用したほうがいい。また、個別入試もありますが、リスニングテストと英語面接だけです。

松本 個別入試について詳しく聞かせてもらえますか。

安河内 はい。まずはリスニングテストですが、これは音を使った学習をするという、今よりも少しは「ましな」ウォッシュバック（波及効果）が起こることを想定して行うことにしました。また英語面接は、英語力ではなく、英

語を話そうとする積極性だけを見ます。英語がうまいかどうか、たとえば発音や文法は一切試しません。

松本 ということは、めちゃめちゃ元気があればいいということですか（笑）。

安河内 そうです（笑）。このことはルーブリック評価としても開示しています。たとえば“May I have your name, please?”という質問に対して“I like panda!”と元気に答えてもいいんです（笑）。

大学入試が変われば
高校の授業が変わる

松本 なるほど（笑）。高校入試についてはどうお考えですか。大学入試が4技能化されたら、将来的に高校入試も変わりますよね。

安河内 私学やトップ進学校などは、保護者からの要求もあり、どうしても大学合格実績が重要になってきます。そうすると、高校は4技能入試に勝てる学生をとろうとするわけです。そしてそのために、当然大学入試に似た問題を出題するでしょう。

松本 ということはやっぱり、各大学が入試を4技能化することによって、高校、中学の入試にまで影響してくる。

安河内 そうだと思います。建前を抜きにして、やっぱり自分の子どもにはいい大学に入ってほしいと思う方が多いですね。もちろん、純粋に英語ができるようになってほしいという方もいるかも

しませんが、親の脳裏には当然大学入試があるわけです。そうすると大元である大学入試が変われば、すべてではないが、たとえば教え方なども変わっていく。今、多くの学校でアクティブ・ラーニングをやらなくちゃいけないと言われていますが、3年生になった途端に口を動かさずに黙々と問題集や赤本を始める学校がとても多いです。まずは最後まできちんと発話しながら学べる環境をつくるのが大切だと思います。

アクティブ・ラーニングは
生徒の可能性を信じることから始まる

松本 アクティブ・ラーニングについて言うと、生徒を信頼しないとできないし、生徒の可能性を信じることから始まります。「うちの生徒では無理だ」と考える先生は、導入できないと思うんです。従来どおりの知識伝達型の授業にしているのは、受験のせいだけではなくて「生徒に何か課題を見つけさせて、それについて英語でディスカッションをさせるのは無理だ」という気持ちがあるからだと思います。

安河内 そうですね。あとはそれぞれの地域における進学校の役割も影響していると思います。日本の高校3年生のなかで大学に一般入試を受けて進学する生徒は全体の約1/4ほどですが、それでも大学入試の影響力がここまで大きいのは、日本中の名の知れた進学校が、それぞれの地域



のリーダーになっていて、そこで
行われている知識伝達型の手法
が、受験にあまり関係のない学校
にまで浸透していることがあると
思います。もっと授業を活動中
心に行うほうがいいですね。

先生どうしが教材を共有し、
負担を減らす

松本 もちろんそうですね。
先生が生徒との一方的な関係
を変えるために、授業を知識伝
達型ではなく活動中心にするな
ら、シラバスも明確にしないとダ
メですね。活動中心の授業で
先生方に必要とされる力として
は、単純な英語力というより、指
導力が大切だと思います。ただ、
活動を一貫性を持って展開する
ためには前もっていろいろなこと
を決めて「仕込み」しておく

必要がありますよね。その意味
で先生の負担が大きい。ただで
さえ、土日もクラブ活動の指導を
しなければいけないし、夏休み中
にも指導しないといけない。普段
からいろいろな書類もつくらない
といけないという状況ですから。
たとえばクラブ活動を学校教育
から切り離すとか、夏は研修の
期間として数週間自由に使える
期間を設けたりするなどの対策が
必要だと思います。

安河内 うーん、そうですね。
私は仕事が趣味みたいなもので
(笑)、朝も晩も働いていま
すが、学校の先生方は自分の勉
強をする時間も、教材研究する
時間もなくて本当に忙殺されて
いる。そんななかで「ご自分で工
夫して努力してください」と言っ
ても難しいので、授業ですぐに使
える教材が供給されないときつ

いな、というのはありますね。

松本 学校の先生はひとりで仕
事をしていることが多いと思いま
す。教材が英語科で共有されて
いない、あるいは高校の場合で
すと学年ごとに違う教科書を選
んでしまうことも多いです。

安河内 私もそのような話を聞
いたときにはびっくりしました。
麹町学園は、完全共有にしてい
ます。教科書については、今は
中学はONE WORLDと心中、松本
先生と心中するつもりでいます
(笑)。高校の教科書についても、
全学年同じものを使うようにしま
した。デジタル教科書やCDも完
備して、生徒が音声にアクセス
できる環境をつくりました。

松本 そうして教科書は変えず
に活動やワークシートなどを、
毎年少しずつ変えていけば、仕
事の量もかなり減りますよね。

安河内 定期試験については、今はそれぞれの先生が、教えた範囲を個別に試験している学校が多いですが、麹町学園では4技能を25点ずつ均等に配分し、スピーキングは平常点による評価、残りはリスニング、日本語を使わないリーディング、自由記述を含んだライティングにし、設問数や形式、範囲も1年生を除いて同じにしています。そうすると直接測定の外部試験への対策にもなるし、ふだんの指導とも一体化しています。

高校の場合には、教科書に登場する単語集とサイト・トランスレーション、あと全文訳を最初に配布するようにしています。生徒はそれらを事前に読んできて内容を把握しているので、授業を活動型にしやすい。

松本 リーディングの力をつけるためには、和訳を先に読ませるのはあまりよくないのではないですか。

安河内 いや、訳を読むかどうかは生徒次第で、自信がない生徒は読んでおくとか、自信がある生徒は読まないとか、生徒それぞれが自主的に調整すればいいと思っています。

授業を活動中心にすると、先生も楽しくなる

松本 あっという間に時間が過ぎてしまって、そろそろ時間がなくなってきました。最後にONE WORLDを使って教えている先生方に何かメッセージをお願いします。

願います。

安河内 知識伝達型の授業が必ずしも悪いわけではなくて、パランスの問題だと思います。でもほかの教科と比べて、音楽、体育、英語は、その割合はぐっと少なくていい。たとえば知識伝達が20%だとしたら活動を80%やるくらいがいい塩梅ではないでしょうか。私自身、予備校で知識伝達型の授業をしていた時期は、授業に行くのが怖くて、嫌でつらかったです。でもそれは「90分間必死で話さないといけない、生徒を寝させないために、常に新しい知識を伝え続けねえといけない」と思っていたからなんです。でも、どれだけ準備しても、つまらなそうに寝ている生徒がいる。そこで3年くらい前に80%くらいは活動に変えてしまったんです。今では生徒は絶対に寝ないですよ。また、昔は仕事のために教室に向かっていましたが、今は自分が生徒と一緒に楽しむために教室に向かっています。そのときの気持ちは、舞浜の駅で降りてディズニーランドへ向かっているような気持ちですよ（笑）。

松本 教室がまるでアトラクション（笑）。わくわく楽しくてしょうがないという感じですね。

安河内 それに、生徒と同じ目線に立てるようになりました。私なんて3単現のsもついていないようなノンネイティブ丸出しの英語で話してますよ（笑）。先生方も変わることへのためらいはあります。でも私の場合は、変わったことによって、生徒も楽し

い、自分も楽しい、成果も上がる、なんらマイナスはなかったです。

生徒と一緒に学ぶ姿勢が大切

松本 今まで教師が教壇に立つ理由は、生徒よりも知識量が多いからだった。「君たちこういうこと知らないでしょう」というように。それが今や教師が教壇に立つ必要がなくて、教室をぐるぐる回って歩かないといけな。自分も「生涯学習者」であるということ強く意識して、生徒と一緒に学ぶという姿勢が大切だと思います。

安河内 ただ、私たち教師には生徒よりも豊富な人生経験があります。だから本文の背景などは生徒に語ることができます。それが中学生・高校生よりも圧倒的に優れている部分です。英語に関してもかなり優れているとは思いますが、帰国子女の生徒の方が英語はできる。そういう子に対して「先生は文法をこう知ってて、お前は知らないだろう」と押さえつけるのではなくて、人生経験的にももしろいことがあったら伝えてあげる。知識伝達型の授業をしているときには、すでに英語のできる帰国子女の生徒たちにとって、私の英語の授業はあまり意味がないものでした。今は彼ら彼女らが、私の最大のサポーターになってくれます。今まで、帰国子女の子たちは英語ができることを隠すことが多かったんです。英語ができることがばれる

と、先生にいじめられたりとか…。

松本 だから、彼女らは、わざと下手に発音したりとか…。

安河内 そうです。でもそんな子たちを「君は発音すごいからみんながこれから発音するときに一緒に助けてくれない？」と巻き込むと、サポートしてくれるし、教室を盛り上げてくれます。そのためには先生が生徒の前でどんな英語であっても自分が一生懸命発話する姿が大切だと思います。

松本 自分が学んでいる姿勢を見せることですね。

先生には、生徒に発話させる力が求められる

安河内 ええ、それに先生が間違ふことほど生徒にとって愉快なことはないです（笑）。人を楽しませることも先生の役割だと思うんです。私が今まで見たなかでいちばんよかった授業は、先生自身の英語が中学レベルの、高校1年生のクラスでした。その先生は発音はでたらめですが、とにかく生徒にしゃべらせる。感じとしては（すべてカタカナ発音で）「メイクペアー、エブリバディ。」「ユーユーズクエスション。『ワットクラブユービロングトゥ？』『ワットドゥーユーライクアバウトディススクール？』」という感じ（笑）。それで僕はいちばん後ろの席の女の子に“What do you like about your school?”と質問したら“I like English because my English teacher is very good.”と答

えました。つまり先生の力というのは生徒に英語を発話させる力であって、美しい授業をする力ではないんですよ。よく「日本人の英語の先生は英語が話せないからタブレットに授業をさせろ」と言われるのを聞きますが、先生たちは英語が話せないわけではない。今英語の先生方に必要なことは、自分の英語力をカミングアウトして、生徒と一緒に活動をし、一緒に楽しむ方向に変わることだと思います。

生徒のポテンシャルを信頼し、チーム学校として団結すること

松本 力強いメッセージありがとうございました。私からは、今の時代あるいはこれからの10年は、日本の英語教育において非常に重要な時期だと思うんですね。本当に大改革のチャンスになる。これを逃すともう日本は沈没したままかなとすら思います。学校においては、生徒にどういう英語の力をつけるのかをはっきり「チーム学校」として意識すること。英語科

のなかでは、その学校の英語教育に対して英語科が一致団結すること。そして教材については、共有化することが必要だと思います。忙しいなか、いかに授業の準備を効率化していくかを考えてほしいです。文科省には学校の先生の負担をどう減らしていくのかを今後も考えてほしい。また、高校においては、学年ごとに教科書を変えるのはやめて、教材は次の学年担当者も使えるように共有化するとよいと思います。成功した活動などは、「こうするとうまくいった」というような情報も共有化することです。個人のレベルでは、安河内先生がおっしゃっているように生徒とともに学ぶ意識が大切です。生徒のポテンシャルを信頼すること。この子たちでは無理だと先生たちが決めつけず、この子たちなら絶対にできるんだと信頼することがいちばん大事だと感じます。ぜひがんばっていただければと思います。本日は本当にありがとうございました。

安河内 こちらこそ、ありがとうございました。



▲対談終了後、教育出版ビル玄関にて

小学校の教科化を踏まえ、 中学校の授業はどう変わるか



千代田区立九段中等教育学校 指導教諭
本多敏幸

平成32年度から始まる新学習指導要領の実施により、小学生は3年生のうちから英語にふれ、卒業までに210単位時間の英語の授業を受けることになります。私たち中学校の教員は、そうして英語に慣れて入学してくる生徒を、どのように迎え入れるべきなのでしょう。

外国語活動導入による生徒の変容

平成23年度に外国語活動が導入されてから、入学生に変化が見られます。文部科学省が平成27年2月に実施した「小学校外国語活動実施状況調査」の結果によると、外国語活動導入前と比べ、中1の生徒に「成果や変容がとてもみられた」または「まあまあみられた」と回答した中学校英語教員は8割を超えます（対象は第1学年担当経験のある教員）。

具体的には、「英語の音声に慣れ親しんでいる」、「英語で活動を行うことに慣れている」、「英語に対する抵抗感が少ない」、「英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されている」という点で特に変容を感じているようです。

私も同様に感じています。1年生の最初の授業はあえて英語だけを使って行いますが、以前は「英語、わからない」とつぶやく生徒がいました。しかし、今は本校のどの生徒も英語で授業を行うことを当たり前のこととして受け入れています。基本的な英語での指示もほとんど理解でき、積極的に英語を使おうとします。また、WhatやWhenなどを使った

疑問文や、canを使った文を聞いて理解できる生徒の数も増えました。

小学校で慣れ親しんだ英語表現を生かして

こうした状況の中、中学校の現在の指導について気になることがあります。それは、小学校でふれた英語表現が、中学1年生用の教科書になかなか登場しないことです。たとえば、How manyやWhat timeなどを使った疑問文、助動詞canは教科書の後半で登場します。

せっかく小学校で慣れ親しんだ英語表現も、使わなければ小・中学校で継続的な指導ができていとは言えないでしょう。これまでのように教科書での導入を待つだけでなく、小学校で扱われた英語表現や語句は積極的に使用すべきです。普段の授業から耳で慣らしていき、いざ教科書で扱うときに文法的な説明や練習及び文字を使った活動（読むことや書くこと）を行えばよいのです。

中学校の指導内容と指導方法はこう変わる

現在の中学1年生で扱っている文法事項も小学校でかなりの部分にふれることとなります。語彙も600～700語が導入される見込みです。簡単な語句や英文を読むことや書くことにも、少し慣れてから入学してくるでしょう。現在、中学1年生で行っている言語活動も小学校で経験してくることが多くなります。これに合わせて、特に1年生の指導内容や指導方法は変えなければなりません。

まず、文法シラバスで教えるのではなく、言語活動に合わせて必要な文法事項や表現を教えていくという発想が求められます。例えば、4月に自己紹介のスピーチを行わせるとしましょう。教育出版『ONE WORLD English Course I』（平成28年度版）のLesson 1の冒頭には、自己紹介のモデルとして、次の英文を載せています。“Hi, I am Ayaka. Please call me Aya. Nice to meet you.”

平成32年度以降の生徒たちは、これに加えて自分の好きなことやよく行うこと、できること、中学校で行いたいことなども述べられるはずです。また、スピーチのあとに、聞き手が話し手に、What color do you like? などと質問することもできるでしょう。このように、入学したての生徒であっても、今より少し高度な言語活動を設定できるのです。

どの生徒にも達成感をもたせるために

一方で配慮が必要なこともあります。小学校で4年間英語にふれてくるということは、入学時点で差があるということでもあります。アルファベットが正確に書けない生徒もいれば、かなり上手に英語を話せたり書けたりする生徒もいるでしょう。そこで、英語が苦手な生徒を支援しつつ、英語のできる生徒も満足させられる授業が求められます。

「英語の授業がつまらない」という気持ちは英語が不得意な生徒だけでなく得意な生徒にも起こります。どの生徒にも達成感をもたせるためには、生徒によって発問の難易度を変えたり、授業に基礎的・発展的な活動の両方を取り入れたりする必要があります。ペアワークやグループワークを用い、学び合わせることも効果的です。

また、言語活動にしかけを施すこともよい方法です。例えば、5文程度のライティング活動を行わせる際、英語が苦手な生徒でもま

ねれば書けるように、モデルとなる英文を提示する、例文の中に少し高度な英文を載せておき、英語が得意な生徒に積極的に使わせる、などです。

今後、高校で教えられていた文法事項も、中学校でいくつか扱われることになります。このことも、生徒が英語で表現できる範囲が増えるのだと、前向きにとらえたいものです。

言語活動の質を高め、豊かな表現力を育てたい

小学校における英語の教科化を受け、言語活動の質を高め、豊かな表現力を身につけさせることが、中学校の指導で一番行わなければならないことだと私は考えます。文法のドリル活動や教科書本文の和訳や音読で終えるのではなく、題材について深く考え理解させ、自分の考えや意見を英語で述べ合う授業を行いたいものです。また、即興で伝え合うこと、まとまりよく言ったり書いたりすること、目的により読み方を変えたり、語数の多い文章を一気に読み切ったりする指導も必要です。

小学校の指導を受けて、または小・中学校の7年間をかけて、どんな生徒を育てたいのか、どのような力を身につけさせたいのか、目標を立てなければなりません。そして、それらを実現させるための方法を考えなければなりません。平成33年度を待つのではなく、すぐにでも取りかかり、できることから授業に取り入れてみませんか？

本多 敏幸（ほんだ としゆき）

中央教育審議会教育課程部会外国語ワーキンググループ委員。中学校英語教科書『ONE WORLD』（教育出版）著者。ELEC同友会英語教育学会会長、英語授業研究会理事。著書に『到達目標に向けての指導と評価』（教育出版）、『若手英語教師のためのよい授業をつくる30章』（教育出版）ほか。

とっておきの英語・13

津田塾大学大学院
野田 小枝子

By believing, Peter.
Just believe.

春号では、平成28年度版One World 3で Lesson 3 Part 2の場面に登場するPeter Panの作者、ジェームズ・バリー（James M. Barrie）についての映画『ネバーランド』の中のとっておきのセリフをご紹介します。

★ バリーと少年たち

『ピーター・パン』のストーリーが作られた1900年代初頭のころの、バリーとルウェリン・デイヴィス家の少年たちとその母親シルヴィアとの交流を描いた映画です。実際の事実に脚色が加えられています。

バリーの新作が観客に不評で、失敗作として劇場も赤字という状況から映画は始まります。舞台女優との結婚生活もあまりうまくいっていない様子です。

あるときケンジントン公園のベンチでストーリーを考えていたバリーは、ひょんなことからルウェリン・デイヴィス家の4人兄弟と知り合いになります。母親のシルヴィアとも打ち解け、バリーは父親を亡くした4人の子どもたちと頻繁に遊ぶようになります。

ジョージ、ジャック、ピーター、マイケルの兄弟の中で、ピーターは父親の死以来、心を閉ざしています。

★ 信じることの大切さ

公園で大きな飼い犬をクマに見立てて踊っ

て見せようとするバリーに子どもたちは大喜びですが、ピーターは「馬鹿げてるよ。ただの犬じゃないか。」とつぶやきます。

バリーがそれを聞きとがめて、『『ただの』だって?』というセリフがあります。

“Just a dog”? “Just”?...

What a horrible, candle-snuffing word. That's like saying, "He can't climb that mountain; he's just a man." Or "That's not a diamond; it's just a rock." "Just." なんてひどい、希望をぶち壊すことばだ。 「ただの人間にあの山はのぼれないさ。」 「ダイヤじゃない、ただの石だよ。」 と言うのと同じだよ。「ただの」ってということばは。

また、風を飛ばす場面で、末っ子のマイケルが風を持って駆け出すと、兄たちが「飛ばないって言っただろ。」などと言い出しますが、バリーは次のように言います。

“It's not going to work if no one believes in him.

誰も信じなかったらうまくいかないんだ。

マイケルの風は兄たちが応援する中、高く上がっていきました。

★ ピーター・パン

バリーはシルヴィア一家を別荘に連れて行き、自然の中で思い切り子どもたちと遊びます。別荘の周りが想像の中でジャングルに

邦題：『ネバーランド』
原題：Finding Neverland
製作国：アメリカ/イギリス
製作年：2004年
監督：マーク・フォスター
主演：ジョニー・デップ
DVD：アミューズソフトエンタテインメント

世界中の人に今なお愛される名作『ピーター・パン』誕生の秘話を映画化。劇作家ジェームズ・バリーと心を閉ざした少年ピーターとの交流を描く。映画の最後では、夢を持つことの大切さを知り、子どもらしいところを取り戻したピーターだったが…。

なったり、大海原になったりし、少年たちは海賊に捕えられたり、インディアンに追いかけられたり、毎日が大冒険です。

子どもたちによってバリーの想像の世界が広がり、『ピーター・パン』の話ができて上がります。

おなじみのピーター・パンのセリフですがあえて引用します。ピーター・パンはいつまでも子どもで、いつまでも妖精を大切にしています。まさに、バリーそのもののなのです。

“ And now when every new baby is born,
its first laugh becomes a fairy.
So there ought to be one fairy for
every boy and girl.
赤ん坊が生まれるたびに、最初の笑いが妖精になるんだ。だからどんな子どもにも妖精がいる。

“ Soon, they don't believe in fairies.
And every time a child says,
“I don't believe in fairies.”
there's a fairy somewhere that falls
down dead.
すぐに、子どもは妖精を信じなくなる。そして「妖精なんていないよ。」と子どもが言うたびに、どこかで妖精が倒れ死んでいく。

★ シルヴィアの死

バリーの『ピーター・パン』は大成功に終

わりました。ところが、シルヴィアの病気が急に悪化、俳優やオーケストラを家まで連れて来て「ネバーランド」を見せたバリーでしたが、まもなくシルヴィアは亡くなりました。

映画の最後のシーンは、ピーターが母の死の悲しみをバリーにぶつける場面で終わります。バリーには、これからもずっとピーターを受け止める覚悟ができていました。

“ Barrie: She went to Neverland.
And you can visit her any time
you like if you just go there
yourself.

Peter: How?

Barrie: By believing, Peter.
Just believe.

バリー：君のお母さんはネバーランドに行っただ。そこは君が自分で行きさえすればいつでも訪ねることができるんだよ。

ピーター：どうやって行ったらいいの？

バリー：信じることによってだよ、ピーター。信じれば行けるんだ。

バリーが子どもたちに伝えるメッセージは一貫しています。スコットランド訛りのバリーを演じるジョニー・デップは、その訛りもうまく役柄に取り入れています。

生徒の中にいる妖精を信じて、また新たな1年が始まります。頑張りましょう。

(写真：PPS 通信社)

Surviving Political Climate Change

Peter J. Collins
Tokai University

今ドキ

英語事情15

twitterstorms:

tweetstorms:

特定の話題がツイッターを
席巻すること。

spinning yarn:

作り話をする事。

spinning:

糸を紡ぐこと。転じて、
事実へ偏った解釈を加えること。

putting a spin on:

政策などにひねった
解釈を加えること。

spin doctors:

政治問題などで、スピンコントロールの
上手いスポークスマンのこと。

alternative facts:

「代替的事実」。

さまざまなテーマについて、辞書に載っていないような、今
ドキの英語について紹介する連載です。今号は最近のアメリ
カの政治情勢を象徴する言いまわしについて。

As an American living abroad, I've been struggling trying to keep up with – and understand – the changing political climate in the US. Usually, I can count on certain media outlets to clarify the important issues, but these days, journalists and reporters seem to be as confused as everyone else!

One important difference these days is that the US President seems to rely primarily on social media to publicize his views. He has become known for his so-called **Twitterstorms** or **tweetstorms**: posting four or five tweets in rapid succession.

In the past, White House spokespeople have sought to spin presidents' more controversial statements. **Spinning a yarn** has long meant "telling a tale." Columnist and presidential speechwriter William Safire traced spin, as a political term, back to the 1950s. By **spinning** a story, or by **putting a spin on** facts, a publicist or spokesperson hopes that their audience will view reality in a different light. Those who are expert at spinning without lying outright are known as **spin doctors**, since they seem to be able to fix whatever is wrong with public perception.

Kellyanne Conway, Counselor to President Trump, seems to have moved a step or two beyond spin. When White House Press Secretary Spicer was accused of exaggerating the number of people attended Trump's inauguration, Conway claimed that Spicer had presented "**alternative facts**," simultaneously coining a new expression and causing a media uproar.

Politicians have always been held accountable for their

views, and those who seem to shift their stance on an issue are often called **flip-floppers**. The term **flip-flop** can be used as a verb, as in “She flip-flopped on immigration” or as a noun, as in “He did a flip-flop on the housing program.” Either way, it suggests inconsistency.

Some politicians, on the other hand, can be counted on to take the same stand in every interview. Do you need someone to complain about the crime rate? Call this mayor! What about a statement about global warming? Call that senator! This practice is known as **rent-a-quote**. Just as you rent a car or a snowboard when you need it, news outlets often “rent” a particular politician when they need a certain opinion.

The media relies on **pundits** for rent-a-quote situations, as well. From the Sanskrit pandita, or “learned man,” pundits are experts on the topic at hand, and are often interviewed about policy, historical background or implications for the future. They are also known as **wonks**, a term that originally meant someone who studied too much. Nowadays, however, pundits don’t mind being called **wonky**; it means they know a lot about their areas of interest.

It’s important for wonks to explain things clearly, and not to use **bafflegab**. To “baffle” someone is to confuse them, and “gab” means to talk endlessly. Some politicians and wonks tend to speak and write in bafflegab, or overly complicated language, either because they want to impress their audience or because they don’t know how to communicate simply.

We live in an age when **fake news** stories surface every day in social media, when governmental policies are announced on Twitter, and when spin doctors are finding new ways to spin. But, with care, we will survive the current political climate change – and the media’s response to it!

flip-floppers:

意見などを急に変える。

flip-flop:

意見などを急に変えること。

元の意味は、(旗などが)パタパタとなる音。

rent-a-quote:

ことばの受け売りをする事。

pundits:

専門家、評論家

wonks:

がり勉家、つまらないやつ。

wonky:

がり勉の、おたくの。

bafflegab:

長たらくわかりにくい表現。

fake news:

嘘のニュース。



●教育出版ウェブサイトをご活用ください。



1学期の学習範囲に対応した
「サマー・ワークシート」



教科書に対応したリスニングテスト

「フリー・リスニングテスト」

どなたでも無料でご使用いただける

「教科書本文の音声データ」



<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>

教育出版 中学校英語

検索

英語教育 通信 ONE WORLD Info (2017年 春号) 2017年3月31日 発行

編集：教育出版株式会社編集局

発行：教育出版株式会社 代表者：山崎富士雄

印刷：大日本印刷株式会社

発行所：教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)

URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509

函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一ビルディング 3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198

東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395

中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825

関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401

中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040

四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134

九州支社 〒812-0007 福岡市博多区2-11-30 クレセント東福岡 E 室
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140

沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411